

『オスマン朝の宮殿建築』

2021/2/20 於 東京ジャーミイ

東京外国語大学講師 川本智史

1. 西アジアにおける住居建築

プライバシーの確保、男性・女性の空間の分離、西アジアでは中庭式住居が一般的
稠密な都市で採光・通風を確保するのに最適の形式、中庭が生活の中心
中庭がセミパブリックな空間、周辺の部屋がプライベートな居室・寝室
アナトリアは少し異質

大規模住宅以外では中庭はほとんど現れない、都市では敷地を壁で囲ったものが主流
傾斜地の眺望のよいところに住宅が建設されることが多い
一階部分は石造で倉庫や馬屋に充てられることが多い
セラームルク(男の間)とハレムリキ(女の間)の区分
ホール(sofa)を中心に置き複数の部屋に連結させる構成が一般的

権力者の住宅が「宮殿」

「すまい」以外にも「政治」「行政」「儀礼」「教育」「生産」など多機能の建築類型

2. トプカプ宮殿以前

「都市内部塔型宮殿」と「巨大中庭型宮殿」という二類型から宮殿建築をみる
王様は高いところから臣下を見下ろすのか、宮殿の奥深くに佇むのか？
トプカプ宮殿は「中庭型」

1) アッバース朝の宮殿

バグダードやサーマッラーにおける宮殿
いずれも大きな中庭を複数備えた、巨大な迷宮的な宮殿
精緻な官僚機構をそなえ、宮廷儀礼が発展するとどうしても大きいハコが必要になる

2) ビザンツの宮殿

トプカプ宮殿南側（現在のブルーモスク東側）にあった宮殿は大宮殿、「中庭型」
謁見の間にはさまざまな機械仕掛け
ところが十字軍の征服を経た13世紀以降は矮小化
城壁側のブラケルナイ宮殿は小規模な塔型の宮殿となる

3) 古都ブルサの宮殿

丘の上の市街地の一角にある小規模宮殿、たかだか100m四方

14 世紀には塔の上に毎朝スルタンが現れて臣民からの請願を受けるとの記録
イスラーム、キリスト教勢力を問わず、この時期のアナトリアに共通する「塔型宮殿」

4) エディルネ旧宮殿

15 世紀初頭にエディルネ旧宮殿でオスマン宮殿の新様式が成立、トプカプ宮殿の原型
中庭での儀礼、外廷と内廷の明確な分離、「中庭型宮殿」への移行

1402 年のアンカラの敗戦後、イエニチェリ軍と官僚を軸とする中央集権国家建設
新たな統治機構と軍団の入れ物・儀礼の場としてのエディルネ旧宮殿

5) エディルネ新宮殿

1450 年頃にエディルネに建設、やはり巨大な中庭型の宮殿
イスタンブル遷都後もエディルネは実質的に副都として機能し続ける

6) イスタンブル旧宮殿

イスタンブル中心部の大きな敷地を占める旧宮殿、トプカプ宮殿建設以前から建設
一般に故スルタンの妻妾が隠居生活を送った宮殿として知られる

トプカプ宮殿とは違い、当初より政治的な機能をもたない

内廷+ハレムだけで構成される宮殿、外廷=儀礼用中庭が存在しない

7) 不要になる宮殿

15 世紀後半以降トプカプ宮殿に内廷と外廷が集約される

帝国各地にある「古い宮殿」は不必要

イスタンブル旧宮殿→Bayezid Camii, Süleymaniye Cami、一部はバザール

エディルネ旧宮殿→Selimiye Cami、ハマームは一般ハマームに転用

セレスの宮殿ハマム→一般用に貸し出し

ブルサの宮殿→トプカプ宮殿台所用の特上小麦粉作成所

8) オスマン宮廷の宮殿群の形成

トプカプ宮殿：内廷・外廷・ハレムの一部

イスタンブル旧宮殿：ハレムの一部

エディルネ新宮殿：宮廷のエディルネ滞在用にトプカプ宮殿と同等の機能を維持

各地の離宮：一時的な滞在先、時に謁見が行われ内廷機能の一部が移管

王子たちの宮殿：アマスヤ、マニサなど王子の出向先にも「ミニトプカプ宮殿」

3. トプカプ宮殿の概要

1450 年代末にコンスタンティノープルの征服者メフメト 2 世が建設を始める

19 世紀までの約 400 年間、オスマン帝国のスルタンと家族が住まう主宮殿となる

イスタンブルの旧市街地がある半島の先端部（かつてのアクロポリス）に位置する

総面積は 700000 m²、それほど大きいものではない

度重なる改修や火災に伴う修復により、一筋縄には理解できない複雑な構成

第一期：最初期の宮殿（1460-80）

第二期：メフメト二世末期の拡充（1480-1530）

第三期：スレイマン一世初期の大改修（1530-）

前近代オスマン帝国の宮殿のうち完全な形で残っているのはトプカプ宮殿のみ

3つの区分 外廷・内廷・ハレム

いくつもの壁で囲われた入れ子構造

第一中庭→第二中庭→第三中庭

第二中庭が外廷の中心、オスマン帝国の中枢で儀礼が行われる、閣議の間

第三中庭が内廷でスルタン個人の空間、謁見の間

第二中庭に隣接してハレム、家族が生活する場所

その他に第一中庭には造幣所や宮廷工房、くわえて馬屋や巨大な厨房など（出入り自由）

4. 儀礼・政治の場としてのトプカプ宮殿

第二中庭周辺に主要な儀礼空間が集中する

- ・表敬門：第一中庭と第二中庭を結ぶ門

ここから先は許可を受けたものしか入れず、スルタン以外は下馬

- ・第二中庭：スルタン即位や祝祭時に大宰相以下主要官人やイエニチェリが整列

200×100m 程度の不整形な空間で草木に彩られる

- ・至福門：第二中庭と第三中庭を結ぶ門

中庭での儀礼時には門下に玉座が置かれてスルトンの御座所となる

- ・閣議の間：週に4回の閣議が開催されるドームの空間

トプカプ宮殿では大宰相が主催し、請願など執政空間となる

1520年代に旧閣議の間に代わって建設される

- ・正義の塔：閣議をスルタンがこっそり眺める（ことになっている）場所

エディルネ旧宮殿以前の「塔型宮殿」の名残を留める数少ない建物

- ・上奏の間：至福門から第三中庭入ってすぐのところにある謁見空間

通常の謁見はこちらでおこなわれる

外国使節らは儀礼的に対面するだけで用向きは直接話さない

5. 生活の場としてのトプカプ宮殿

1) 内廷（第三中庭周辺）

- ・私の間（ハスオダ）：16世紀後半までスルタンが寝起きした場所

それ以降も新スルタンはまずここで迎えられる重要な空間

現在は宮殿所蔵の聖遺物が展示され写真撮影不可

- ・宝物庫

- ・アフメト3世の図書室（18世紀）

小姓たちの教育・生活の場ともなる内廷

2) ハレム (第二中庭横)

ハレムの女性たちと 16 世紀後半以降はスルタンも寝起きする場所

出入りは黒人宦官によって厳重に管理される

小部屋が連続する構成、皇太后がもっとも大きい権力を持つ

スルタンに寵愛された女奴隷は「部屋 (オダ)」を与えられる

基本的に権力の集中を避けるためスルタンは結婚しない

一夫人一男子の原則、分裂を避けるための兄弟殺しの慣習

兄弟殺しの廃止後は、スルタンの兄弟をハレムに軟禁して控えメンバーとする

6. 岸辺の離宮と近代宮殿

政治的な空間であるトプカプ宮殿のほかにボスポラス海峡と金閣湾沿岸に離宮建設

- ・ユスキュダル離宮 (16 世紀～)、夏場に船に乗ってスルタン一行が滞在
- ・チュラーン宮殿
- ・ベシクタシュ宮殿
- ・ベイレルベイ宮殿

居住区画と小さなパヴィリオン群、庭園がセットになり風光明媚な海の景色を楽しむ場
一方で 17 世紀以降トプカプ宮殿に集積された諸機能は徐々に分散

政治・行政⇒大宰相府、各種官庁

教育⇒新式学校

トプカプ宮殿が近代化過程で放棄されて宮廷もドルマバフチェ宮殿(1856～)へと移る
アルメニア系で宮廷主席建築家のバリヤン親子による設計

息子のニコゴスはパリのエコール・デ・ボザールで学びヨーロッパ様式を熟知

当時ヨーロッパで流行するロココ・新古典主義風宮殿を設計する

日本の赤坂離宮を含め、世界中同じような宮殿 ヴェルサイユ宮殿が一つのモデル
ファサードが強調

内部空間は伝統的なセラームルクとハレムの 2 つの区画

対外的な交渉の場としての機能が期待される

⇒大使の間(スフェラー・サロヌ)と大ホール(ムアーイエデ・サロヌ)で拝謁、中庭は消滅
階段の強調(ミケランジェロ考案、垂直の要素で空間のより劇的で動的な広がりを見せる)
ガラス張りの天井(19 世紀鋳鉄製の型枠にガラスをはめ込む大規模構造物が誕生)

ハレムはヨーロッパ風のシンプルな配置、中央にサロンか通路、その両側に妃たちの居室

参考文献

小笠原弘幸『オスマン帝国 繁栄と衰亡の 600 年史』中央公論新社、2018.

川本智史『オスマン朝宮殿の建築史』東京大学出版会、2016.

N. M. ペンザー（岩永博訳）『トプカプ宮殿の光と影』法政大学出版会、1992.

G. Necipoğlu, *Architecture, Ceremonial, and Power –The Topkapı Palace in the Fifteenth and Sixteenth Century*, Cambridge, MA and London, England: The MIT Press, 1991.